

もくじ

はじめに

第1章 教育の役割って何だろう

- 1 日本の教育
- 2 学力とは
 - ① 目に見える学力と目に見えない学力
 - ② ほんとうの学力とは

第2章 わが子を勉強で失敗させないために

- 1 勉強の習慣が身につく躰をしよう
 - ① 生活習慣で「持続力」をつけよう
 - ② コミュニケーションで「集中力」をつけよう
- 2 子どもの「やる気」を引き出すほめ方・叱り方
- 3 遊びで「意欲と好奇心」を養おう
- 4 わがままと自己主張とは区別しよう
- 5 家のお手伝いで「応用力」をつけよう
- 6 子どもに夢を持たせよう
- 7 人生を変えた出会い

おわりに

はじめに

2002年4月から新学習指導要領が実施されました。それは授業時間数で2割(2001年4月と比較した場合1割)、学習内容で3割という大幅な削減がなされました。これにより、「学力の低下」と「学級崩壊」の問題が指摘されていましたが、同年12月、文部科学省の全国調査で、初めて実態が明らかになりました。

そこで、お母さん方にとって、切実な願いでもある子どもの教育、とくにわが子の将来を考えたとき、勉強で失敗させないためには、どのようにしたら成績が上がり、学力が伸びるかについて知りたいと思うでしょう。

文部科学省は、学力の定義を、これまでの「知識の量で学力を測る学力観」から「自ら学び、自ら考えるという新しい学力観」(これを「生きる力」と呼んでいます。)に変更しました。これまでの教育内容では、詰め込みすぎで、落ちこぼれを出すから、それを削減することで、ゆとりを持って勉強ができ、落ちこぼれがなくなると考えたからです。

しかし、ほんとうの理由は、ご存じのように教職員の完全週休二日制導入が目的なのです。教師は、もはや聖職者ではなく労働者だから、他の労働者と同じように労働時間の短縮が必要だという理由です。よく考えてみてください。たとえ教師が労働者だとしても、何も学校を週5日制にしなくても他に方法があったのではないのでしょうか。これが、ほんとうに子どもたちの将来を考えたことなのではないでしょうか。

週休二日制を導入するにあたって、文部科学省は、「授業時間数が減るの

だから、知識の量が減るのは当然のことだ」と学力の低下を認めていました。しかし、それでは、国民の納得は得られません。そこで、「総合的な学習の時間」というものを設けるとともに、新しい学力観を導入することで教育の一大転換を図ったのです。この新しい学力観は、知識の量とは無関係だから、知識の量がどれだけ減っても、学力は低下しないというしくみになったのです。

ほんとうに、そうなのでしょうか。この新しい学力観というのは、一定の知識の量（ここでは「基礎学力」と呼ぶことにしましょう。）が備わって、初めて実現できるものです。義務教育である小・中学校は、その基礎学力を身につけるところです。その基礎学力が削減されて、文部科学省がいう「自ら考え、自ら学ぶ」ということができるはずがないのです。ましてや、高校受験、大学受験という入試制度は依然として存在しており、私立の小・中学校では、授業時間、学習内容とも今までと同じという状況の中で、学力の低下は当然のことです。

あとで詳しく説明しますが、「生きる力」を実現させるための条件は、学校で教えられるものではなく、日常の生活や遊び、家庭でのお手伝いなどをおして実体験から学ぶものなのです。

新学習指導要領の実施は、ある意味では、ゆとりの時間ができたのですから、喜ぶべきことかも知れません。しかし、子を持つ親として、子どもの将来を真剣に考えたとき、これでほんとうにいいのでしょうか。

このような教育の現状の中で、これ以上子どもたちの学力を低下させず、如何にして成績を伸ばすかについて、具体的な方法をまとめて見ました。

2003年1月